Sayer Says! 第8回

Sayerは英語でのニックネーム。
本連載では，生物学を中心とする
自然科学の“研究という場”について考えてゆく。

斎藤成也

（さいとう・なるや）1957年福井県生まれ。1979年東京大学理学部生物学科人類学課程卒業，1986年テキサス大学ヒューストン校生物学医学大学院修了（Ph.D.）。1989年東京大学理学部助手，1991年国立遺伝学研究所助教授，2002年同教授。総合研究大学院大学遺伝学専攻，東京大学大学院生物科学専攻教授を兼任。日本学術会議会員。専門分野はゲノム進化，人類進化。

師との関係

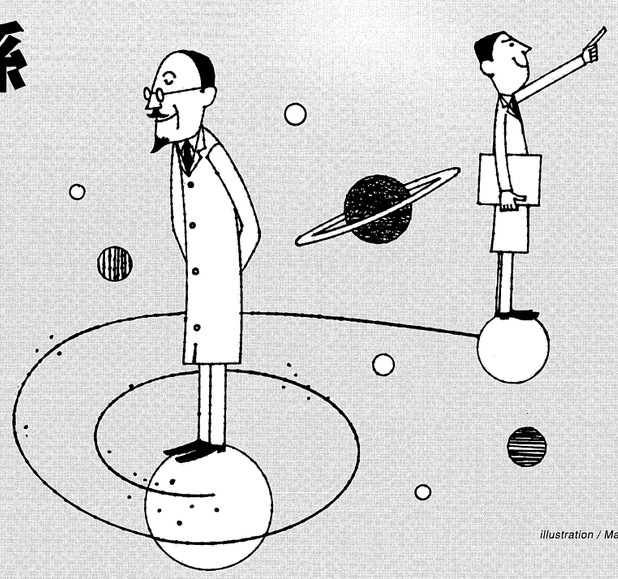

illustration / Masaaki Hosoda

マスターとメンター

前回は独学について書いたので，今度は師匠との関係について考えてみたい。英語では，ある分野のことを習得するという意味の動詞と，習得のための師を表す名詞は，ともに“master”である。修士号も英語ではこの単語を使う。おそらく，かつては修士号がきわめて格の高いものだった名残であろう。

映画『スター・ウォーズ』シリーズの中核ともいえるジェダイ騎士団では，修行士パダワンは師マスターと1対1の関係を長くすごす。たとえば，パダワンとしてのアナキンのマスターはオビワンだった。

私には研究上の師が二人いる。学部から大学院修士課程までの自然人類学の師は尾本恵市先生*1であり，アメリカ留学時代の分子進化学の師は根井正利先生*2である。現在でもこれら二人の師と交流があり，いろいろと影響を受けている。

ギリシャ神話に登場するオディッセウスには，テレマコスという息子がいた。父親がトロイ戦争に出征していたあいだにこの息子を指導した老人の名前がメンターである。このため，彼の名前が個人的な師という意味で使われることがある。最近では「メンター」という概念が安売りされる傾向があるが，本来は，一人の人間にとって，メンターは一人しかいないはずである。

私にとってのメンターは，幼少時から父親の飲み友達として我が家によく来られていた，故高村正秀氏である。旅館の経営者であるとともに仏教者であり，俳句を作り，書にも優れていた彼からは，いろいろなことを教わった。グローバルに考えろと何度も言われた。その教えに関係するのだろう，高校生のときに，読めと言われて渡されたのが『坂の上の雲』*3だった。私の最初の単著(1)は，彼にささげた。

守・破・離，そして還？

師との関係を表わす言葉として，「守破離（しゅはり）」がある。剣道の世界の言葉だとも，あるいは茶道の世界でも言うそうだが，研究の世界にもあてはまるだろう。最初は師から教えを受け，それを「守る」段階がある。修練が進むと，やがて師の教えの一部に疑問をもち，それを乗り越えてゆく「破る」段階に進む。さらに，自分自身で作り上げた新しい道を進んでゆくことにより，師から「離れる」ことが最終段階である。

私が兼任している総合研究大学院大学の生命科学研究科遺伝学専攻の入試英語問題に，師匠との関係を論じた文章が出題されたことがある。その結論は，師匠と共同研究者になれたら一番よいと書いてあった。「守破離」を理想とすれば，これは誤りである。師匠から離れていないからだ。私自身，かつての師からは少し距離をおいて，自分の研究の色を出そうと努力してきたつもりである。若い人々にも，守破離の話を時々することがあった。

ところが最近になって，師匠との交流が再び活発になり，守・破・離のあとに第4の段階があるのではないかと思うようになった。ひとつには，平均寿命が延びたこともあるだろう。かつては，師から独り立ちしたころには，師はこの世を去ってしまっていることが多かった。現在では，老いてますますさかんな研究者が多くなっている。

*1 尾本恵市
おもと・けいいち。1933～。分子人類学を長年研究し，日本人の起源やフィリピンのネグリトの系統関係の解明に貢献した。

*2 根井正利
ねい・まさとし。本連載第5回(2009年9月号)を参照。

*3 『坂の上の雲』
司馬遼太郎著の歴史小説(1968～1972年，産経新聞連載)。近代国家として幕開けした明治期の日本を舞台に，広い世界の存在を知った主人公3青年の成長・活躍を追う。

*4 木村資生
きむら・もとお。本連載第4回(2009年7月号)を参照。

*5 梅棹忠夫
うめさお・ただお。1920～。遊牧民の生態を中心とする民族学が専門だが，『知的生産の技術』などの活動もある。国立民族学博物館初代館長。

*6 大野 乾
おおの・すすむ。1928～2000。脊椎動物の染色体の研究から，遺伝子重複，とくにゲノム重複による進化の重要性を強調した。「がらくたDNA」の命名者でもある。

参考文献
[1] 斎藤成也：『遺伝子は35億年の夢を見る』大和書房（1997）
[2] 斎藤成也：『ゲノムと進化』新曜社（2004）
[3] 斎藤成也：『DNAから見た日本人』ちくま新書（2005）
[4] 梅棹忠夫：『行為と妄想－私の履歴書』中公文庫（2002）

すると，壮年の弟子との共同作業が再び始まるということだろうか。この新しい段階を仮に“還”とすれば，起承転結のようであるが，「守・破・離・還」ということになる。

ただ若いあいだは，やはり守破離の流儀に沿って，師匠からはどんどん離れてゆこうと心がけるべきであろう。

謦咳に接する

師匠ではないが，謦咳（けいがい）に接する（尊敬する人から直接話を聞く）経験も重要である。私の場合，木村資生先生*4におこられた話，ほめられた話は，2番目の単著(2)のなかに詳しく書いた。またアメリカでの師，根井正利教授，人類進化をはじめとする分子進化学勃興時代を牽引し，1991年に惜しくも白血病で亡くなったアラン・ウィルソン博士，およびスタンフォード大学で長く現代人の進化を研究しているキャバリ-スフォルザ教授のことを，3番目の単著(3)に書いた。

私は若いときから，民族学・人類学の巨人，梅棹忠夫さん*5とそのグループに興味をもち続けてきた。彼らの著作を読み，その活動の広さには尊敬の意を払ってきた。数年前に国立民族学博物館にうかがって，梅棹さんにインタビューをさせていただいたことがある。すでに自伝(4)を一度読んでいたが，インタビューに備えてもう一度読み返した。やはりおもしろかった。自伝のタイトル『行為と妄想』からして奇抜である。彼の知り合いの一部には批判するむきもあったらしいが，自身の人生を客観的に眺めた結果としての題名であろう。

インタビューにおいて私のもった最大の疑問点のひとつは，京都大学理学部動物学を卒業した梅棹さんが，どの時点から民族学や人類学に興味の中心を移行していったのかだった。この質問に対して彼は，「そうだなあ，張家口（中国河北省北西に位置する市）で遊牧を調べていたころかなぁ」と答えてくれた。理科系から文科系に専門分野を転じることを「文転」とよぶが，梅棹氏はある意味で偉大な文転者である。人間に興味の中心をもつ医学分野でも文転する人々がいる。作家でいえば，最後まで医者であり続けたが，森鷗外がそうだろう。

世の中には，教えを受けてみたい人々が膨大な数で存在する。これら実際に会うことができない人の人生に触れてみるには，伝記を読むことだ。アメリカのちょっと大きな書店に行くと，伝記コーナーを設けているところが多い。個人を重んじる欧米の伝統なのかもしれないが，日本でももっと伝記を読むべきだと思う。

数年前にある評論家が，日本の科学雑誌のひとつを批評したときに，研究者の伝記が多いという批判をしていた。たしかに，伝記には物理学の数式も生化学の反応式もほとんど出てこないかもしれない。しかし，偉大な研究者がどのように育ち，どのような環境で研究を進めていったのかを知ることは，とてもよいことだと思う。私が小学1年生のときに図書館で最初に借りて読んだ本は，キュリー夫人の伝記だった。はじめて聞く名前だったので，最初「キュウリ夫人」だと勘違いし，野菜の名前の変な女性だなと思って，その興味から借りて読んだのだが，とても感銘を受けたことを記憶している。

年下に教えてもらう

師とは自分よりも知識や経験の優れている人だから，年齢は関係ないはずだが，中国語では，日本語の「先生」にあたる言葉が「老師」であり，年齢が上であることが前提のようだ。これは儒教の悪しき伝統であろう。

知識と見識のなかで見習うことがあれば，当然年下の方であっても，師というわけではないが，教えを請うべきである。とくに，現代は知識が爆発的に増加しているので，なにかを教えてもらう場合，年齢は上も下もあるだろう。

大学院生時代に，アルバイトで小さな予備校の講師をしていたことがあるが，個人指導の際に，当時の私よりも10歳以上年上の方を教えたことがある。その方はなんのてらいもなく，淡々と私の指導を受けてくれた。

最近，私の研究室の学生から，Ohnolog（あるいはOhnologue）という概念を教えてもらった。これは，順系相同遺伝子（paralog）や傍系相同遺伝子（ortholog）をヒントにして，ゲノム重複による進化の重要性を指摘した故大野乾博士*6に敬意を表した造語らしい。脊椎動物の共通祖先で2回のゲノム重複を経た重複遺伝子をさす言葉だ。

このような耳学問を軽蔑するむきもあろうが，現代はインターネットの時代である。耳にした単語や概念をネット検索すればすぐにいろいろな追加情報を発見できる。新しい情報はむしろ若い人々が先につかむことが多い。私たち壮年者は，年下の人々からどんどん新しい知識を吸収すべきである。